

2026 年 1 月

サイバー大学アセスメントプラン検証結果報告書

本報告書は、アセスメントプランに基づき、アドミッション・ポリシー (AP)、カリキュラム・ポリシー (CP)、ディプロマ・ポリシー (DP) を起点として、入学から卒業までの学修成果を検証・分析し、その結果を改善に結びつけた事例をまとめたものである。

I. 大学全体レベル

アセスメントの目的

大学全体で掲げる人材育成目標を達成できているかどうかを多角的に点検・評価し、授業内容・指導方法、カリキュラムの改善だけでなく、入学者の受入れから卒業までの様々な活動および支援の充実・強化につなげることを目的とする。

達成すべき質的水準

AP に対応して入学した者が、CP に沿って編成された教育課程での学修活動を経て、卒業までに学位プログラムにおける DP に定めた能力を修得すること。

II. 学位プログラムレベル

アセスメントの目的

学位プログラムの DP で掲げる人材育成目標を達成できているかどうかを多角的に点検・評価し、授業内容・指導方法、カリキュラムの改善だけでなく、入学者の受入れから卒業までの様々な活動および支援の充実・強化につなげることを目的とする。

達成すべき質的水準

AP に対応して入学した者が、CP に沿って編成された教育課程での学修活動を経て、卒業までに学位プログラムにおける DP に定めた能力を修得すること。

III. 授業科目レベル

アセスメントの目的

科目で掲げる到達目標を達成できているかどうかを客観的に成績評価し、アンケートによる学生の主観的評価の結果も踏まえて、授業内容・指導方法の改善だけでなく、学修サポートの強化と単位修得率の向上につなげることを目的とする。

達成すべき質的水準

シラバス作成ガイドラインに沿って設定された小テスト・レポート・ディベート・期末試験による各課題の配点割合に従い、100 点満点に換算して 60 点以上を修得すること。

I. 大学全体レベル

【概要】

外部アセスメント (GPS-Academic) および各種アンケート分析の結果、本学学生の高い思考力とカリキュラム満足度が確認された一方で、「コラボレーション」の育成および若年層（20～24歳）の定着に課題が特定された。これらを踏まえ、次期中期目標の策定に改善策を取り入れるとともに、主体性を促す「自由参加コース」の設置や、若年層への伴走型支援「U24 学生支援プロジェクト」等の具体的施策を実行に移し、履修継続率の向上等の成果を得ている。

1. 学修成果の多角的分析結果

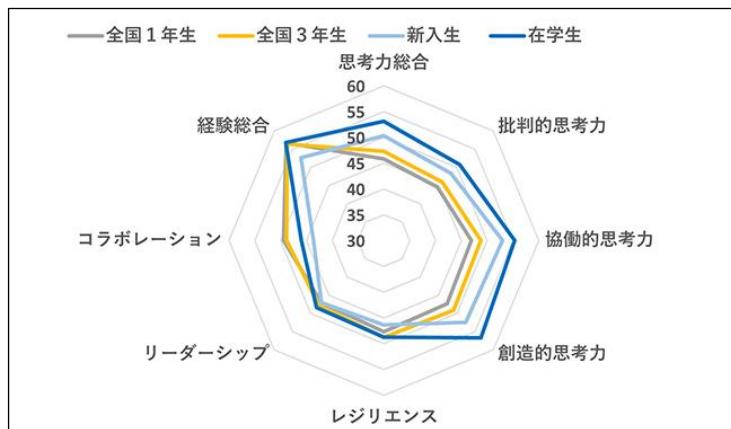
①外部アセスメントテスト (GPS-Academic) による客観的評価

・思考力の伸長

外部アセスメントテスト (GPS-Academic) の結果、在学生の「思考力総合（批判的思考力・協働的思考力・創造的思考力）」は、新入生および全国平均（1年次生・3年次生）を上回る水準にあり、学年進行に伴う明確な成長が確認された。

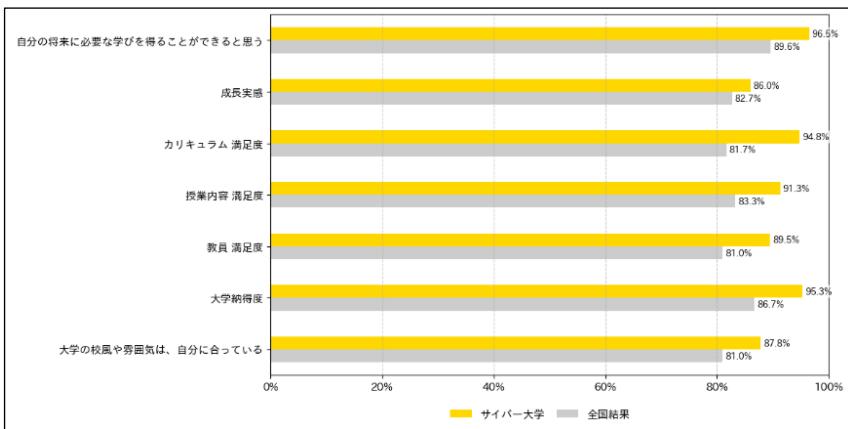
・課題の特定（コラボレーション）

一方で、「コラボレーション（特に外向性・親和性）」のスコアについては、全国平均と比較して低い傾向が見られた。本学の特性として、思考力の高さに対して「姿勢・態度」面での課題が特定された。



・高いカリキュラム満足度

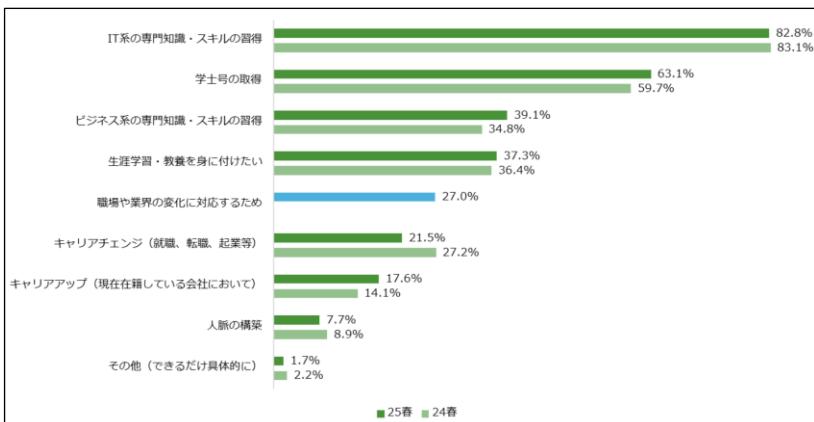
学生意識調査において、在学生のカリキュラム満足度は 94.8%（全国 3 年生平均 81.7%）と極めて高く、成長実感も全国平均を上回っていることが確認された。



②各種アンケートによる学生意識の把握

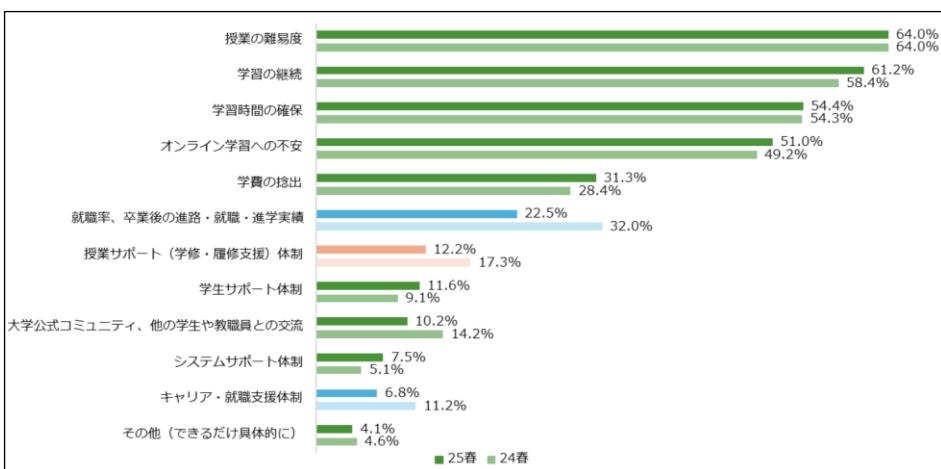
・入学動機の変化（新入生アンケート）

生成AIの普及等を背景に、キャリアチェンジ以上に「現職でのスキルアップ」を目的とする社会人の入学が増加傾向にあることが確認された。



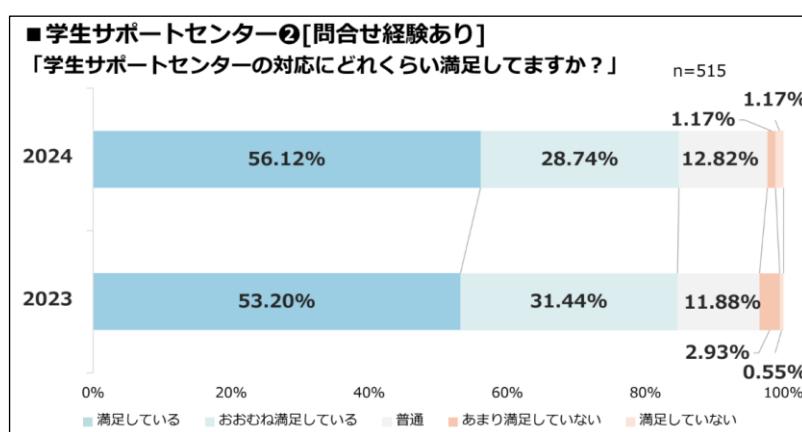
・学習への不安（新入生アンケート）

新入生の約6割が「学習の継続」や「授業の難易度」に不安を感じており、サポート体制の重要性が浮き彫りになっていることが確認された。



・サポート体制への高評価（全学生アンケート）

学生サポートセンターの満足度は84.86%に達しており、応対音声のモニタリングをはじめとする品質管理活動が、オペレーターのスキル向上に直結し、改善施策が奏功していることが確認された。



・学習環境に関する学生の声（全学生アンケート）

動画の再生速度調整やテスト画面の視認性など、システム面での具体的な改善要望が寄せられた。

③データ分析による課題特定

・若年層の離脱

データ分析の結果、20～24歳の学生におけるドロップアウト率が他年齢層より高いという課題が特定された。

④ステークホルダー評価による検証（就職先へのアンケート）

・強み（課題解決・批判的思考）

就職先より「課題解決力」と「批判的思考力」が高く評価されており、DX推進やプログラミングにおいて即戦力として活躍している実態が確認された。

・弱み（コラボレーション）

「コラボレーション」については、就職先から「どちらとも言えない」との評価であり、チーム協働に関する教育成果に課題が残ることが明らかになった。

2. 分析結果に基づく改善・実行

①客観的評価およびステークホルダー評価の結果に基づく改善

・アクティブ・ラーニング（科目内交流会）の推進

外部アセスメントテスト (GPS-Academic) の結果および就職先へのアンケートの結果、「コラボレーション」に課題があったことを踏まえ、オンライン環境下での「コラボレーション」不足解消の一環として、リアルタイムでの「ライブセッション（科目内交流会）」を強化した。開催回数は、2025年度春学期のみで80回に達し、過去2年の春学期開催実績（2023年度春学期24回、2024年度春学期22回）を大幅に上回っており、教員と学生、学生同士の双方向な学びの場が大幅に拡大している。

②学生意識の把握に基づく改善

・「自由参加コース」による主体性の涵養

新入生アンケートにおいて、「スキルアップ」を目的とする入学生が増加傾向にあることや「IT系の専門知識・スキルの修得」を目的とする入学生の割合が高いこと、また「学習の継続」に不安を感じていること等を踏まえ、学生の知的好奇心を刺激するとともに学生とのエンゲージメントを強化することを目的に、正規の授業科目とは別に、教員が自発的に作成した多様なコンテンツを学生が自由に学べる仕組みとして、2024年度秋学期から「自由参加コース」を設置した。2024年度秋学期には5コース、2025年度春学期からは新たに1コースを開設し、参加者数は約500名に達するなど、自律的な学びを促進している。



No	コース名
1	トレンドコンテンツ（ビジネス系）
2	ビジネスパーソンの継続学習とアントレプレナーシップ（ビジネス系）
3	生成 AI を使った事業計画書エグゼクティブサマリー作成方法（ビジネス系）
4	画像処理アプリケーション開発（テクノロジー系）
5	Web ページ制作実習（テクノロジー系）
6	リスニングのための発音練習（英語）

（参考） [大学ホームページ「さらに広がる、主体的な学びの機会」](#)

・学習基盤（Cloud Campus）の機能改善

学生の声を反映し、動画再生速度の細分化（1.25倍速、1.75倍速追加）、テスト画面のコントラスト改善など、ユーザビリティを向上させた。

③データ分析に基づく改善

・若年層向け重点支援「U24 学生支援プロジェクト」の始動

ドロップアウト防止のため、組織横断的なタスクフォース「U24 学生支援プロジェクト」を 2024 年度秋学期より開始している。コーチによる能動的な声かけと伴走型支援の結果、対象学生は対象外の学生よりも履修継続率が高い水準を達成している。

④大学全体の分析結果に基づく改善・実行

・次期中期目標（2026～2030）のビジョン策定への反映

アセスメントプランに掲げる取組の実施状況を踏まえ、「科目内交流会」や「自由参加コース」の設置、「U24 学生支援プロジェクト」の指導といった具体的な改善施策を実施しているが、並行して現行の中期目標の検証を行い、学長ビジョンやアセスメントデータを統合し、次期ビジョンの策定を進めている。「個別学習サポートの強化」や「教育 DX の推進」など、分析結果を踏まえて 10 の主要テーマを具体化し、PDCA サイクルを次期計画へ接続させている。

II. 学位プログラムレベル

【概要】

DP 達成度検証において、マイクロクレデンシャル (MC) 制カリキュラム履修者の自己評価が総じて高い傾向にあることを確認した。一方で、全学同様に「コラボレーション」項目の評価が低いことから、学修成果可視化のためのレーダーチャート導入等の改善を実施した。また、社会需要の高い「デジタルマーケティング」分野の MC 新設および関連科目の体系的な拡充を決定した。

1. ディプロマ・ポリシー (DP) 達成度の分析結果

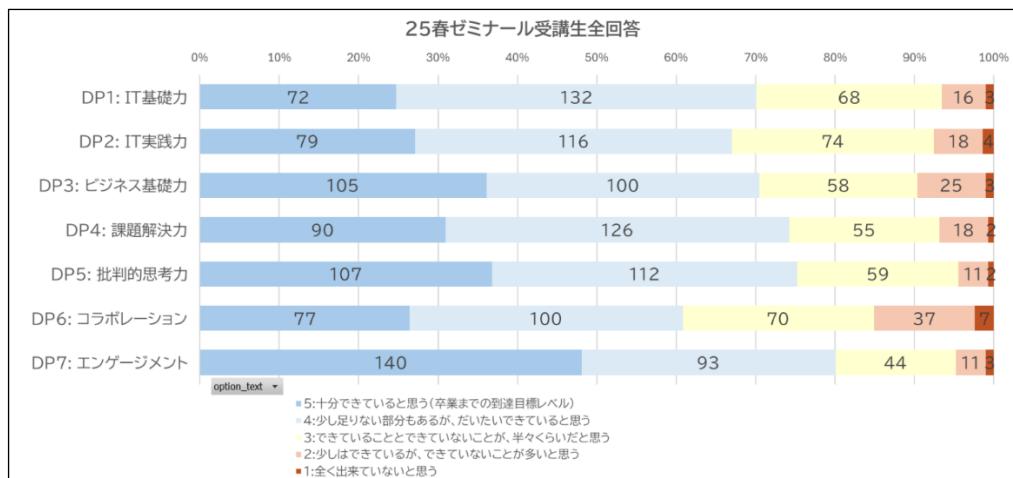
①卒業研究における DP 自己評価検証

・エンゲージメントの向上

卒業研究（ゼミナール）履修生による DP 達成度自己評価（7 つの能力）では、「DP7：エンゲージメント（主体的に学び続ける態度）」が最も高く評価された。

・コラボレーション課題の再確認

大学全体レベルの分析と同様、「DP6：コラボレーション」の自己評価が他の項目と比較して低く、重点的な改善領域であることが確認された。



②新カリキュラムの効果検証

・マイクロクレデンシャル (MC) の導入効果

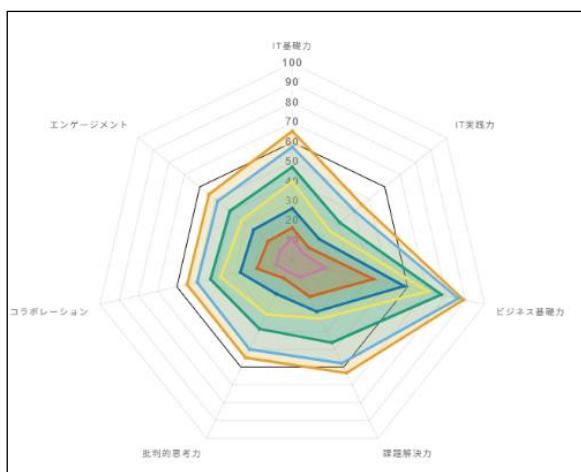
新しいマイクロクレデンシャル (MC) 制カリキュラム履修者は、従来のカリキュラム履修者に比べ、「7 つの能力」の全項目で自己評価が高い傾向にあることが確認された。

2. 分析結果に基づく改善・実行

①学修成果の可視化チャートの導入

卒業研究における DP 自己評価検証において、「コラボレーション」に課題があることは認識したものの、卒業段階のタイミングでの把握であり、各学年・学期ごとの成長が把握できないという課題もあった。また、外部アセスメントテスト (GPS-Academic) の結果においても同様に「コラボレーション」に課題があることを認識したものの、希望者のみが受検していることから全学生の学修成果を把握できないという課題があった。

これらを踏まえ、学生の「間接評価（主観的評価）」だけでなく、成績に基づく「直接評価（客観的評価）」を提示することで、学生自身が自らの成長を段階的に確認できるようにするために、2025 年度春学期よりレーダーチャート「ディプロマ・ポリシーにおける 7 つの学修成果」を導入した。このことにより、学生自身が課題を認識することで、更なる成長を促進するとともに、学生の自己評価と成績による直接評価のギャップを比較することで、一人ひとりの履修指導や面談等への活用も進めている。



②マイクロクレデンシャル (MC) の導入効果を踏まえた改善

・卒業研究科目の成果発表会の開催

卒業研究における DP 自己評価検証において、マイクロクレデンシャル (MC) の導入効果は把握できるものの、学生自身の評価のみならず大学としても DP の達成度の観点で導入効果を把握する必要があった。また、マイクロクレデンシャル (MC) 制カリキュラムの卒業研究科目では、プラチナレベルのクレデンシャルを発行するため、教育の質保証が重要であった。

これらの課題や学生のエンゲージメント強化を目的として、2025 年度春学期より、新たに卒業研究科目の成果発表会を開催した。20 名が研究発表を実施し、効果的な成果共有が図られた。なお、研究内容および発表技術等を総合的に評価

した結果として、1名に最優秀研究発表賞、19名に研究発表賞を授与している。

卒業研究科の成果発表会目的

1. 教育の質保証：指導教員間の情報交換促進、指導内容の質向上
2. 学生のモチベーション向上：成果発表の機会提供、表彰を通じた学生への評価と奨励
3. 学内での情報共有促進：各ゼミナールの研究内容を在校生への共有、ゼミナール選択の参考
4. 学修成果の可視化：学外への卒業研究の説明

(参考) [大学ホームページ お知らせ「卒業研究科目 成果発表会を初開催しました」](#)

・マイクロクレデンシャル (MC) の拡充

マイクロクレデンシャル (MC) 制カリキュラム履修者は、従来のカリキュラム履修者に比べ、自己評価が高いという傾向を踏まえ、学習意欲の更なる向上を目的に、また、データ分析力を持つマーケティング人材への需要増（社会ニーズ）に対応し、2026年度春より新たなマイクロクレデンシャル「デジタルマーケティング（ゴールド/プラチナ）」を開設することとした。

新規科目として「デジタルマーケティング論」、「デジタルマーケティング実践」、「ゼミナール（デジタルマーケティング論）」を開講し、戦略立案からデータ分析まで体系的に学ぶプログラムを提供予定である。

段階的にデジタルマーケティングスキルを習得
(関連科目との関係)

関連科目

- データサイエンス入門
- マーケティング入門

デジタルマーケティング バッジランク：ゴールド

- デジタルマーケティング論 ※2026年度春学期開講予定
- 商品企画論
- デジタルマーケティング実践 ※2027年度春学期開講予定

デジタルマーケティング（卒業研究） バッジランク：プラチナ

- ゼミナール（デジタルマーケティング論）※2027年度秋学期開講予定

※「データサイエンス入門」「マーケティング入門」「商品企画論」は開講中
※習得した知識やスキルは4段階のオープンバッジ（ブロンズ/シルバー/ゴールド/プラチナ）で証明可能

(参考) [大学ホームページ お知らせ「「デジタルマーケティング」を完全オンラインで学ぶ 新プログラムを2026年春に開講」](#)

III. 授業科目レベル

【概要】

授業評価アンケートにおける満足度は 4.11 と高水準を維持しているものの、当該学期において一度も授業コンテンツを視聴していない状態（以下「サイレント」という。）の上昇が課題として浮上した。受講行動の類型化分析に基づき、未履修者等へデータに基づく個別指導を行った結果、対象者の約 6 割以上が履修登録を行う改善効果が見られた。併せて、キャリア教育の早期化や中国語科目の刷新など、教育内容の適時見直しを進めている。

1. 授業科目における学修状況の分析結果

① 学習管理システム（Cloud Campus）データの定点観測

・受講に関する課題

全授業科目の「サイレント」の率が上昇しており、初期段階での離脱が増加していることが確認された。また、「スタディスキル入門」などの必修科目において、特定の課題で受講率が低下し、その後、受講中断に陥るリスクがデータから示された。

・行動パターンの類型化

受講履歴のない学生を分析した結果、「学習困難型」、「漸減努力型」、「完全放棄型」、「選択的学習型」などに分類され、一律ではない背景があることが判明した。

1. 学習困難型：意欲はあるが効果が出ない。
2. 漸減努力型：徐々に意欲が低下。
3. 完全放棄型：実質的な学習放棄。
4. 選択的学習型：必要な科目のみ効率的に学習。

② 授業評価アンケートの検証

・高い授業満足度

授業評価アンケートにおける満足度は 4.11（5 段階評価）であり、大学全体での目標値（4.00）を上回る高い水準を維持していることが確認された。

（参考）[大学ホームページ「2025 年度 授業評価アンケート集計結果」](#)

2. 分析結果に基づく改善・実行

①データに基づく履修指導

授業コンテンツの受講データ分析や受講履歴のない学生の行動パターンの分析を踏まえ、U24 学生支援プロジェクトを中心に行動パターン別のアプローチを実施するとともに、教務課におけるフォローも継続して実施することで、受講率の向上につなげ、最終的に全視聴学生の割合が上昇した。

また、未履修や特定科目の単位修得が不足する在籍者などを 15 のカテゴリに分類して、学期開始前に履修指導を実施した。この結果、対象者の 66.58% が履修登録を行い、定量的な改善効果が実証された。また、新たな課題（スタディスクール入門の単位未修得等）も特定され、次期の指導計画に反映させている。

②授業評価や社会動向を踏まえた授業内容・構成の見直し

・キャリア教育の早期化

授業評価アンケートの結果やインターンシップの一般化といった社会動向の変化を踏まえ、「就職活動実践演習」の配当年次を 3・4 年次から 1・2・3 年次へ変更し、早期準備を可能にした。

・中国語カリキュラムの刷新

授業評価アンケートの結果を踏まえ、現代中国の情勢を反映させるため、旧来の科目を廃止し、2026 年度より新科目「中国語基礎」へ順次移行を予定している。

以上